

F1-17

**東京都海上公園の利用傾向に関する研究**  
**- 芝浦南ふ頭公園を事例とした行動観察を通じて -**  
**A study on the use tendency of the Tokyo Marine Park.**  
**- A case study of SHIBAURA MINAMI wharf sea-side park-**

○竹内寛偉<sup>1</sup>, 畔柳昭雄<sup>2</sup>, 菅原遼<sup>3</sup>

Takeuchi Takeuchi , Kuroyanagi Akio , Sugahara Ryo

Abstract : This study was disclosed by the behavior of Wharf sea-side-park .The behavior of visitors was understood by non-participant observation . This was a case study at one area ; Shibaura Minami Wharf Sea-Side Park . The result of investigation , it could obtain 224 samples. It analyze, principally the locus of detention and action. The result of analysis the visitors behave on divide the park in 4 zone. Then was proved the behavior and used time of different.

1. はじめに

東京都では1970年に「東京都海上公園構想」を策定し、2015年9月現在までに38カ所の海上公園（海浜公園（7）、ふ頭公園（18）、緑道公園（13））を設置してきた。海上公園は空間の独立性が高い内陸部の都市公園と異なり、その立地特性上、前面に広がる海の景観や開放性を享受できるなど、臨海部特有の親水性や自然に触れ合える公園としての特徴がある。

海上公園に関する研究は、利用者の年齢層に着目し、活動傾向から施設整備及び配置計画に資する知見を得たもの<sup>1)</sup>があるが、概して海浜公園を対象とした研究であり、ふ頭公園や緑道公園に関する研究は皆無である。そこで、本稿ではふ頭公園を対象に利用傾向を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

Figure1に調査対象地と調査範囲、Table1に調査概要を示す。調査対象地は、工業エリアに立地する芝浦南ふ頭公園とした。調査方法は、行動観察調査とアンケート調査を並行して行った。アンケート調査は調査範囲の出入口2箇所に調査員を配置し行った。尚、今回の調査では公園内にフェンスが張られている芝浦南ふ頭公園運動広場は調査対象範囲から除外した。

3. 分析方法

Table2に調査対象地の空間構成を示す。対象地の空間構成は散策路、階段、広場、緑地に分類できる。

また、公園の利用者は通行者と滞留者に分けられることから、5秒以上停止した場合を滞留者（224名）と見なし、散策路、階段、広場、緑地における滞留時間・滞留

活動・空間分布を捉えた。

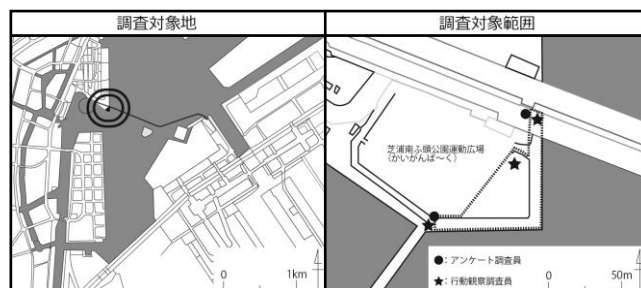


Figure1.Surveved sites and range  
Table1. Survey Outline

項目	概要					
調査対象地	芝浦南ふ頭公園					
調査期間	2015年8月の土曜日 日曜日 9:00~18:00					
調査日	8月9日	8月15日	8月22日			
天気	快晴	快晴	晴・曇			
最高気温	36.6℃	34.4℃	34.2℃			
最低気温	28.0℃	27.9℃	29.0℃			
最高湿度	64.0%	63.2%	78.0%			
最低湿度	38.0%	39.4%	64.0%			
調査名	観察調査			アンケート調査		
調査内容	・ビデオカメラによる定点撮影 ・目視による行動観察			・面接調査法		
被験者	79名	83名	92名	26票	33票	44票
	254名(滞留者224名)			103票		

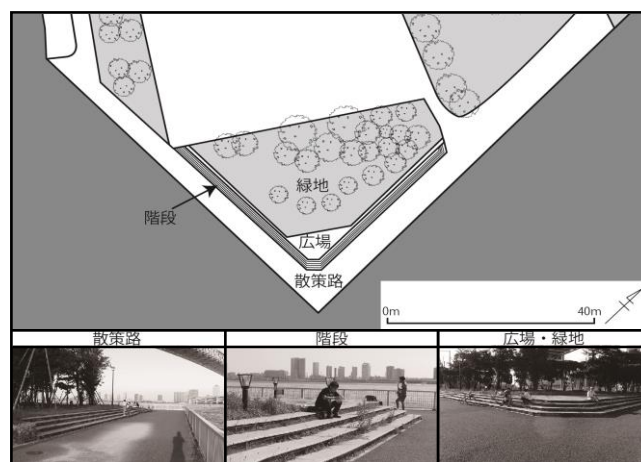


Figure2.Spatial composition of the park

1 : 日大理工・院(前期)・海建 Graduate School ,Nihon-U. 2 : 日大理工・教員・海建 Prof ,CST ,Nihon-U. ,Dr. Eng.

3 : 日大理工・教員・海建 Research assistant ,CST ,Nihon-U. ,M.Eng

4. 結果

4. 1 行動観察調査からの利用傾向

Figure3 に空間別の滞留時間を、Table2 に利用者が滞留する際の体位と行動観察調査より抽出した 17 の行動パターンを静的活動、静的・動的活動、動的活動に分類したものを、Figure4 に滞留者の分布を示す。

散策路の滞留時間は 5 分未満の滞留者が 60%以上を占め、平均滞留時間は 22.7 分と他の空間より顕著に短時間の滞留がみられた。また、立位で「風景を見る」「写真撮影」「会話」などの静的活動の他に「運動」などの動的活動が混在しており、分布も海側に集中している。

階段と広場の滞留時間は 60 分以上の滞留者が 30%程を占め、着座や仰臥しながら「風景を見る」「写真撮影」「飲食」「日光浴」「昼寝」などの静的活動が大半を占めているが、階段では「遊ぶ」などの動的活動も確認できた。階段の滞留者の分布は、階段上部に集中しており、西側に比べ東側の滞留者数が多いことがわかる。こうした分布は東側から見える対象物であるレインボーブリッジやお台場方向の景観により利用傾向に影響を与えていると考えられる。

緑地の滞留時間は 50%が 5 分未満で、立位で「風景を見る」「飲食」などの静的活動が見らるが、他の空間より滞留人数が少ないことがわかる。これは、緑地の維持管理が不十分であるため、利用者の進入や滞留を妨げていることが要因として考えられる。

4. 2 アンケート調査からの利用傾向

Table3 に利用者属性を集計したものを、Figure5 に公園の利用圏を示す。来園動機は「この公園で何かをするために立ち寄った」が 58.4%を占めている。利用頻度は「初めて」が 23.3%と最も多く、2回目以降の来園者は「週に 1 回程度」「月に 1 回程度」で 21.4%、20.4%と続く。主な利用日は「土曜日」「日曜日」「休日」が 75.1%と顕著である。公園までの交通手段は「徒歩」「自転車」が 65.7%を占め、利用圏では、公園が立地する港区や隣接する江東区が大半を占めていることから近隣住民による利用が明らかとなった。

5. おわりに

本稿では、芝浦南ふ頭公園の利用傾向を散策路、階段、広場、緑地の 4 つの空間から捉えた。その結果、滞留時間に影響を及ぼす要因は、滞留する際の体位と活動内容、滞留場所からの景観や維持管理が大きく関係していることが明らかとなった。また、利用日は主に「土曜日」「日曜日」「休日」で、利用圏は「徒歩」「自転車」による近隣住民による利用傾向が明らかとなった。

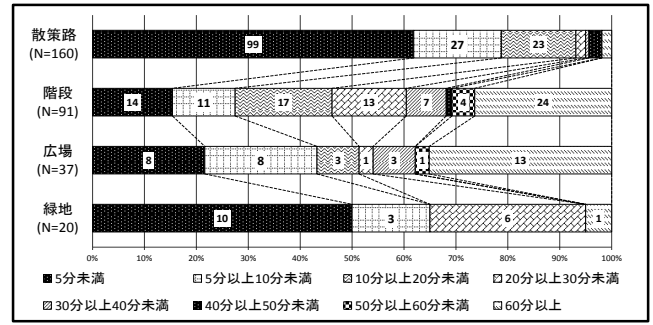


Figure3. The residence time in space

Table2. Behavior pattern

空間	体位			静的活動										静的・動的活動			動的活動		平均滞留時間			
	立位	着座	仰臥	風景を見る	水面を見る	木を見る	グラウンドを見る	写真撮影	読書	日光浴	昼寝	食事	釣り	携帯操作	会話	電話	喫煙	犬の散歩		清掃	遊ぶ	人数
散策路	144			111	18		3	58	1	3	1	4	4	4	8	58	2	5	5	2	149	22.7
階段	43	80	15	73	6	2		17	8	14	14	29		31	32	1	3	4	4	8	91	37
広場	18	26	16	29	3			7	2	18	13	12		11	8		1	2	1		34	71.1
緑地	20	2		9		4		4	1	1	1	6	1	3	8		1	3			21	58.9

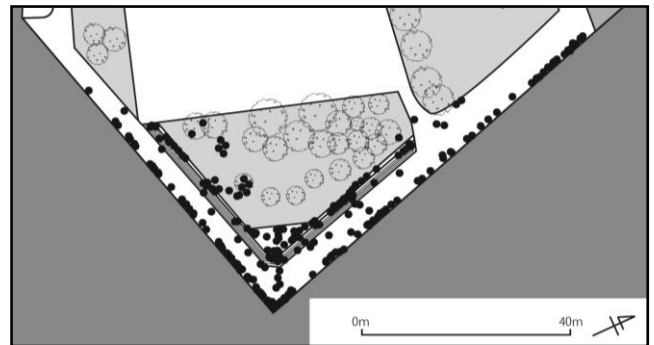


Figure4. Stayer of distribution

Table3. Subject attribute

項目	人数	%	項目	人	%	
来園動機	この公園で何かをするために立ち寄った	59	58.4	平日	2	2.1
	この近くの別の場所に来訪し、ついでに立ち寄った	20	19.8	土曜日	9	9.4
	特に目的があるわけではないが、何気なく立ち寄った	22	21.8	日曜日	9	9.4
利用頻度	初めて	24	23.3	休日(土・日・祝日)	54	56.3
	ほぼ毎日	9	8.7	曜日に関係なく利用する	22	22.9
利用頻度	2~3日に1回程度	3	2.9	自動車・バイク	28	29.2
	週に1回程度	22	21.4	電車	5	5.2
	2週に1回程度	12	11.7	自転車	30	31.3
	月に1回程度	21	20.4	徒歩	33	34.4
年に1回程度	12	11.7				

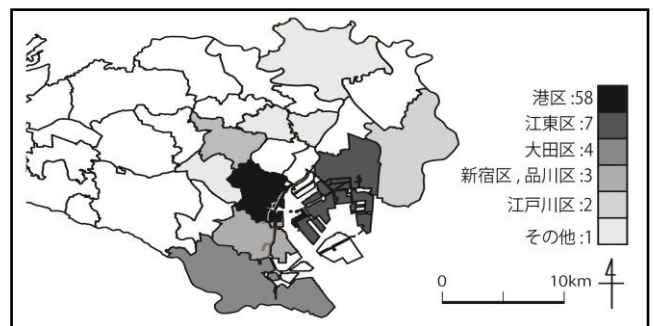


Figure5. Utility area of Tokyo

6. 参考文献

野中太郎 他 2 名：「お台場海浜公園の夏季における利用者の年齢層から見た活動内容と活動範囲に関する研究」ランドスケープ研究日本造園学会誌 第 64 号, pp659-pp664, 2001.3